

ディケンズとコリンズの精神科学

Our Mutual Friend と *Armadale* における意識の諸相

Dickens, Collins, and Mental Science:

Aspects of Consciousness in *Our Mutual Friend* and *Armadale*

野々村 咲子

Sakiko NONOMURA

序論

19 世紀中期の精神科学の視軸をもとに、ディケンズ (Charles Dickens) の *Our Mutual Friend* (1864 - 65) とコリンズ (Wilkie Collins) の *Armadale* (1864 - 66) を読み解いてみたい。両作品は、1864 年からという同時期に執筆が始められ、また両作家の成熟期における作品と位置づけることができる。さらに、19 世紀中期というのは、人間の意識と無意識の精神構造についての議論が深まりを見せる医学的領域における転換期でもある。そのような時代において、両作家がいかにして当時の精神科学の論争に参加したのか、またそれらの論争は両作品においていかに表象されるかを考察したい。

1

19 世紀、精神科学 (mental science) が医学の専門分野としてだけでなく新たな知的学問として定着した。意識の性質、記憶の働き、自己認識と意志の限界についての疑問がこの哲学の中心的な問題を形成していた。意識の二重性 (double consciousness) についての議論が深まる中、意識の変容した状態としての無意識、夢、狂気に対する関心が高まる。人間の意識の感覚は、精神内部の変容についてどこまで認知し統括しうるのか。心理学は、意識・無意識の精神構造の集大成としての個人の生を集合的な変化の過程へと結合させるものとして有機的な社会理論に貢献してきた。

夢は、意識と無意識の精神構造が乖離したものでありながら結合したもので

あるということを示す事象である。骨相学者マクニッシュ (Robert Macnish) は、夢は部分的な睡眠の状態を示すものであり、その中で我々は遠くかけ離れた過去の経験を再編成し再演する傾向にあると論じた (49)。夢の理論においては、生理学的心理学の観点から身体と精神の影響関係が特に強調され、夢は身体的な即座の感動を夢見ている者の性質によって決定される鮮明な心象へと変容させるものと論じられた。シモンズ (John Addington Symonds)、ハランド (Henry Holland) らは、眠りとは単一の状態ではなくて常に波動し続ける一連の状態であると説明し、特異の精神機能がある一定の期間内はその眠りの影響下に置かれると論じた。そして、夢によって起こる積極的な変容の過程と狂気の恍惚状態との間に共通性を見出した。夢の異常性と同様に、不眠状態もまた狂気的一端と結び付けられた。彼らは、夢が単線的な時間の概念を切断して、長く忘却されていた観念と特異な傾向とが結合することによって、夢を予言的なものに見せているのだと論じた。

深遠なる自己の開示としての夢についての関心は、「ダブルコンシャスネス」についての論争で更に開拓される。自己を分割する鍵は脳の構造内にあるとする生理学的な見地から、ハランドは、脳そのものが二重に分割された器官であると論じた (187)。さらに、ウィガン (Arthur Ladbrooke Wigan) は、大脳は単に分割されているだけではなくて二つの乖離した脳から成り立っていて、互いに協調し合うか反発し合うかしながら働くのだと主張した (27)。シモンズは、そのような「ダブルコンシャスネス」の状況では、個人が異なる心的アイデンティティを併せ持つのだと論じた (27)。脳の実質も内容も絶え間ない変容を繰り返しているということを見れば、記憶そのものがまったく不確かだということになり、安定したアイデンティティとは幻想に過ぎず、個人の過去の語りから弾き出された一つのフィクションに過ぎないのである。

以上のように、心理学は生理学と有機的な社会理論に結び付けられた特異な学問分野として確立し、意識・無意識の働きについての議論は社会的アイデンティティの性質についてのいっそう幅広い議論の一部をなしていた。意識・無意識の働きについての疑問は知的文化に浸透し、心理学の議論が、統一の取れた合理的な人間性を模索する上で、意識の健全な状態と病的な状態、男性的な意志と女性的な脆弱、未熟と成熟、野蛮と文明との間に境界線を引くことによって支配的な階層性を強固なものとしようとするが、それらの境界線の不確定に留まり、無意識の領域を管理し統御したい欲求に駆られるのであった。精神病患者の道徳的管理と無拘束原則の提唱者であるコノリー (John Conolly) は、神経性疾患の重圧の下でイギリス国民の大部分が危険に晒される脅威から救うためには、唯一医学の監視が必要不可欠となると論じている (495-96)。神経性疾患

が社会に蔓延しつつある現代において、社会全体の秩序と安寧が脅かされている。正気と狂気との間に階層的な境界を確立したいという衝動は不確定なままに留まっており、精神の異常性に対する不安は深まる一方であった。

近年の研究によって、19世紀の医学や文学など様々な領域が女の狂気と男の医学の関係が方式化してきたことが明らかにされてきた。Janet Oppenheimは、当時の医学者たちが女性の神経系の異常を典型的な女性機能の神経的な混乱によるヒステリーという分類をすることに安住していたのだと指摘している(181)。Helen Smallはヒステリーが文化的かつ歴史的に特異なフェミニニティそのものを意味する「病気」であり、ヴィクトリア時代のジェンダー的な役割分担による病的な副産物だと論じている(17)。このような時代に、ディケンズとコリンズは男の感受性に焦点を当て、それが社会にいかなる影響を及ぼし、さらに社会においてそれがいかに処理されるかという問題に取り組んでいる。両作品は、男の感情の激変を病の言説で捉え、それを狂気と定義づけるという点で一致している。

2

精神構造に関する医学の論争は、ディケンズが編集する定期刊行物 *Household Words* のいくつかの記事に取り上げられている。中産階級の家庭向けの雑誌として、*Household Words* は幅広い領域についての情報を掲載しており、科学や医学についての当時最新の議論についても敏感に対応していた。サラ (George Sala) は、意識と無意識の精神構造の二重性について説明している。ストーン (Thomas Stone) は、夢の予言性について、さらに、病気や神経系の夢への影響について論じている。マン (Christopher Mann) は、生理学的・神経学的心理学の観点から、神経組織の働きと精神の働きを言い当てている。

この同時期にあって、ディケンズとコリンズの小説はいかに科学や医学に関する議論を表象しているだろうか。*Our Mutual Friend* と *Armadale* の両作品は、当時の生理学的心理学・神経学的心理学の議論に積極的に関与していると思われる箇所が節々にある。*Our Mutual Friend* は、生理学との兼ね合いから人間の心理を理解しようという試みが見られ、身体と精神の密接な関係について示唆している。たとえば、ヴェニアリング (Veneering) に代表される上流階級の世界を「慢性の炎症を起こした消化不良の状態」(“a chronic state of inflammation arising from the dinners”, 604)と表現している。また、赤ん坊のベラ (the baby Bella) は口やかましく騒々しい祖母ウィルファー夫人 (Mrs. Wilfer) が近づくと、「胃酸過多症になって嫌悪感を表す」(“being invariably seized with a painful acidity of the stomach”, 736)。身体と精神は密接な関係にあり、精神が病むとき身体は、

特に生理学の文脈から、消化不良を起こして病の状態に陥る。社会全体の病める状態にも同じ比喩を用いているというわけである。また、ウィルフアー夫人の厳しくも表面的な人物評価は、観相学の修辭で皮肉をもって描かれ(“her remarkable powers as a physiognomist,” 117), 人間の心理を理解するためにはより生理学的な見解が希求される。Armada もまた、生理学的心理学の観点から精神と身体との関係を表す傾向にある。特にピクニックの場面では、「食事こそが精神に極めて重要な影響を及ぼす」(“How inestimably important in its moral results — and therefore how praiseworthy in itself — is the act of eating and drinking! The social virtues centre in the stomach”, 250) として、胃腸の働きと精神及び社会の健康の関係性を強調する。両作品は単に消化の問題だけに留まらず、更に「ダブルコンシャスネス」についての議論に積極的に関与しながら、精神構造における意識の諸相についての理解を深めていく。

3

ディケンズの *Our Mutual Friend* には、意識の二重性と不確定な境界に対する不安が蔓延している。個人の意識の認知し得ない無意識の領域を意志の力で統制しうるか否かに焦点が当てられる。無意識の問題としては、抑圧できない欲望に囚われ、モノマニア的な症状を示す個人が、自身の健全な精神生活を阻むだけでなく、他人の心身の健康を蝕み、社会全体の安寧を妨げる恐れのある危険分子となる脅威が挙げられる。

ハーマン(John Harmon)、レイバーン(Eugene Wrayburn)、ヘドストーン(Bradley Headstone)の三者において、抑圧された自己とそれによって発する精神の二重性なるものに注目が向けられる。ハーマン扮するロークスミス(John Rokesmith)について、ウェッグ(Silas Wegg)が「裏表のある顔つき」(“double look”, 302) と称したことによって想起させられるように、個人が二重の顔を持つというテーマは、作品全体の様相を指示するものである。

ボッフィン(Boffin)は、ハーマンになにか抑圧したものがあると気づき、彼の抑圧された声と圧迫された調子を観察する。この時ハーマンは、自分のアイデンティティを明かさずに他者を演じることによって、周囲の思惑を見抜こうという意図があるので、彼のこの抑圧が自己の積極的な意志の働きによるものであるということが出来る。奔放で抑圧されない自己が体制の破綻を引き起こす恐れがあるならば、自己の個人的な自助の精神が必要となってくる。ハーマンの抑圧は社会に適應していくための個人の健全な精神の現われとして描かれている。個人の精神と社会の関係が強調される生理学的心理学の観点から見れば、社会的環境のなかで対応していく精神のあり方と重ねられる。

ハーマンの顔にはなんらかの翳りがあり、彼の過去の体験の刻印ともいえるものが消えずに見え隠れする(193)。作品は、過去の記憶と現在の個人の意識との関係についての考察を深めている。ハーマンの場合は、「自分を抑圧してある役割を演ずるように強いているが、それは心の弱さからではなくて、私には確固たる目的がある」(“I repress myself and force myself to act as a part. It is not in tameness of spirit that I submit. I have a settled purpose,” 513)と自ら弁明しているように、自主的に認知しコントロールしうる抑圧として挙げられる。個人と社会との関係で見れば、社会に適応すべくなされた抑圧なのである。最初に彼が登場したときよりもまして、自主的な意志の積極的な働きによって社会をよりよく維持するための個人の抑制として、ハーマンの抑圧については見方が変化している。

レイバーンは「我が尊敬する父上」(“my respected father,” 149)と繰り返し、自己の確立における父親の影響の大きさを自覚している人物である。彼は父親を、子供の将来の職業や経路をすべて前もって手配し決定してしまう父親として語り、子供はまさに彼の犠牲者なのだと言う。レイバーンは父親の定めたルールの上を進むだけの人生、自分の思い通りにできない人生に疑問を感じ始めるものの、思い通りにしようとする意志すらも圧迫してしまう幼少期からの抑圧の記憶を反復することによってさらなる抑圧を自ら加えていく。そしてその結果として、自分を「謎の魂」(“embodied conundrum,” 283)として認識することになる。ここで見られるのは、自己を分割し、異化している状況である。しかし彼の場合にも、分割された自己を統御しようとする意志の働きが見られる。ハーマンのときと同様に、社会的環境の中で自己を順応させようとする意志の力である。

ヘドストンの場合、前者二つの例とは異なり、意志の力によって統御できない自己の二重性を挙げている。彼は完璧なまでの落ち着きを持った態度を身につけていたものの、そのリスペクタビリティの装いの裏には、完璧に抑圧しきれないで蠢く感情の激しさを併せ持つ人物である。特に、彼のリジー(Lizzie Hexam)への激しい愛情と、それに伴って湧き起こる恋敵レイバーンに対する憎悪の念は、彼の抑圧の意志の及ばぬ激情として燃え上がる。レイバーンは、最初の会見の際に、ヘドストンが徐々に危険な狂気の相へと近づいていくのを観察している。

ヘドストンは、社会的に低い身分の家で生まれ育ったが、そこから自分の努力によって脱出したことを自負しながらも、彼の幼少期の記憶は脳裏にしっかりと根づいていて、それを想起させるようなきっかけを通じて、記憶が一気にまざまざと蘇り、その記憶の時点へ退行していく。リジーとの関係に執着するあまり自己の遍歴にこだわるヘドストンを、レイバーンは「おかしな偏執狂だ」

(“a curious monomaniac,” 291) と称する場面がある。モノマニアは、フランスのエスキロール (Jean Étienne Esquirol) によって発見定義され、イギリスへはプリチャード (James Cowles Prichard) によって 19 世紀中期に紹介された。エスキロールは、感受性の不可解な異常を表す病気であって、その内容は社会形態に応じて変化すると論じた (200)。プリチャードは、モノマニアは部分的な狂気であって、理解力が部分的に混乱したり、なんらかの特異な幻想の影響を受けたりして、一つの対象物への言及や一連の思考内容への関連を反復する症状を示すと説明した (12-13)。モノマニアは、正気と狂気の境界に位置すると考えられ、その境界の不確かさを示す現象であるといえよう。Our Mutual Friend の小説世界にはこのモノマニア的な症状が蔓延する危険を孕んでいる。

レイバーンはヘドストンのような病的な抑圧からは解放されているかに見える。しかし自分の行動の是非について、特にリジーとの結婚の是非について考える度に幼少期の記憶と父親の影響に思いを馳せるレイバーンもまた、ヘドストンと同じくモノマニア的な症状にあるといえる。モノマニアという一種の狂気の形態は、その定義は程度の問題によるしかなく、その境界が不確定で曖昧模糊としたものである。作品で問題とされるのは、社会的環境においてそのモノマニアがいかに表象されるか、社会的状況と個人の精神とがいかなる関係性にあるべきかという点に集約されていく。

リジーへの想いとレイバーンへのライバル意識が深まるにつれて、ヘドストンの様子はますます病的なものになっていく。「彼の胸中には殺意が渦巻いていた。それを彼は意識していただけでなく、怒り狂う自分の心に刺激を与えて、その疼きに一種倒錯した快感を覚えていた」(“The state of the man was murderous, and he knew it. More; he irritated it, with a kind of perverse pleasure akin to that which a sick man sometimes has in irritating a wound upon his body,” 535)。自らを解放するのではなく、偏執的な思いに自らを縛りつけることによって自らを傷つける。そうして得られた喜びは歪められた自虐的なものとして語られ、彼の精神状態は健全でない病的なものとして、自らの意志の力が及ばぬところで異化されていく。

病的な精神状態の一つの症状として、眠りのない状態が注目される。ハーマン殺しの情報収集のために奔走するライトウッド (Mortimer Lightwood) が疲労のあまり「夢遊病者」(“somnambulist,” 179) のように眠りに落ちるのに対して、レイバーンは眠りのない状態を保ったままである。さらに悪化した例として、ヘドストンもまた眠りを妨げられた状態に長く陥っており、彼が殺人の計画を練る合間と殺人未遂の罪を犯した直後にのみ、ライダーフッド (Roger Riderhood) の隠れ家において死んだような深い眠りに落ちていく場面が強調される。

以上のように、ハーマン、レイバーン、ヘドストンの三人はそれぞれ欲望を抑圧した状態で登場するのであるが、それぞれのプロセスを経て三者三様に無意識の状態へと向かう。Jane Wood は *Bleak House* でのエスタ (Esther Summerson) と *Great Expectations* でのピップ (Pip) を例に挙げながら、ディケンズの主人公たちが一種の譫妄状態を経験した後に、身体のみならず精神も健全な状態に回復するという過程を辿ると指摘している (129 - 31)。譫妄状態がトラウマ的な過去と折り合いをつける手段となり、無意識の記憶を発掘することが、特異な権力構造の中で社会的なアイデンティティを探求していくプロットの中心となっている。

ハーマンは船で英国に帰国する途中に襲われ、意識朦朧の状態になる。「それは私ではなかった。私などというものは、自分の認識内にはなかった」(“But it was not I. There was no such thing as I, within my knowledge,” 363)。彼は、自己の認識する限界を超えた意識を自己ではない別のものとして異化しており、これは自己の把握し得ない無意識の領域を示すものといえる。レイバーンもまた無意識の状態を体験する。彼はヘドストンに襲われ、意識が朦朧とした中で意識と無意識の間をさまよう。「心中を語りたい欲求、しかし語るができない。その状況が意識が戻ったときの彼を苦しめた。そしてそのもどかしさ故にかえって早く意識を失った。深みからやっと浮かび上がってきた人があがけばあがくほど早く沈むように、彼の必死の努力は昏睡状態への逆戻りをかえって早める結果になった」(“His desire to impart something that was on his mind, his unspeakable yearning to have speech with his friend and make a communication to him, so troubled him when he recovered consciousness, that its term was thereby shortened. As the man rising from the deep would disappear the sooner for fighting with the water, so he in his desperate struggle went down again,” 721)。ここで意識の深層は「深み」として語られ、その深淵にある無意識と格闘しながらもやがて否応なく引き戻されてしまう状況が語られる。ここでもやはり、意識と無意識は異化された二つの精神状態として互いに反応し合うものとして扱われる。

このように、ハーマンとレイバーンは、他者からの暴力により意識を失い、譫妄状態を体験する。この無意識の状態を経験することによって、精神統御に向かうプロセスを辿る。病める意識の二重性を持つものが健全なる意識の確立に向かうまでには、個人の意志の力と他者の精神的な影響力の二つが必要になる。特にハーマンの場合、意志の力による決断と行動を重視する人物で、彼の精神の二重性は、強い目的性を持った意志の力に基づく演技だと断定し、彼の行動は自己実現に向かう過程として位置づけられる。一方レイバーンの場合、彼の意志の力は何度となく崩壊しかかるが、それでもようやく健全なる自己実現を達成しうるその過程には、他者の支持と影響力がある。まず、親友ライトウッドは、レイバ

ーンが自分の過去と精神状態を告白しうる、彼のよき相談役であり唯一の理解者であった。しかしライトウッドはレイバーンが意識と無意識の間を彷徨っているとき、人形衣装仕立て人のジェニー・レンにその橋渡し役を依頼する（“Mortimer would often turn to her, as if she were an interpreter between this sentient world and the insensible man,” 720）。これは、医学を含む男性原理の到達し得ない無意識の統御を、神秘主義的な手法に任せて解決しようとする試みだといえる。また、その身体までも蝕まれて思うように動かせない状態にあるとき、彼を全面的に受け入れて結婚したりジーの献身があったからこそ、彼は心身ともに健全な状態へ移行することを考えると、彼の復活は医学だけでは及ばない人間的な影響力の必要を示唆している。病める精神の二重性とその心身への悪循環を阻み、健全な状態を取り戻すための二つの要因として、個人の意志の力と他者の影響力は絶対不可欠のものなのである。

シモンズによれば、「眠りは無意識の現われ」であり、この論から考えるならば、眠りに関して精神の改善に向かうこれらの主人公たちは精神の善性を備えるものということになる。それに対してヘドストンは、殺人計画の前後に昏々と眠り続けるが、もしこれを無意識への近づきと考えるならば、眠りによって罪へと近づき、さらに罪を決定的なものにしていくその状態こそが、本性たる獣性を引き起こすものであり、抑圧のもとに縛り付けておくことのできない激情の無意識下における現われといえる。さらに、個人の意志の力と統率力もなく、他者の影響力なく社会から断絶し孤独の只中にあるヘドストンは犯罪に手を染める結果に陥る。彼は病める精神をもち狂気に至るといふ個人の苦悩の問題に留まらず、殺人という社会の安寧を脅かす危険分子になる。

ヘドストンは、ユージンを襲撃した後、何をしても常にその体験の記憶にとらわれてしまう。それは罪の意識ではなく、その罪を復習しては反省しながら、罪を完璧なものに仕上げていくものである。彼はそのような状況を「運命」として諦める（“Fate, or Providence, or be the directing Power what it might”, 771）。人間の意識における、意志の力ではどうしようもない無意識の働きを「運命」の仕業として片づけようとしている。

小説全体としては、社会全体が慢性的な消化不良の状態として患っていたのが、健全な社会へと移行する。その過程を推し進めるものとして、ハーマンとレイバーンの無意識の体験と譫妄状態からの生還、ヘドストンの発狂と死の二つが挙げられる。ヘドストンが社会全体の無意識の危険をすべて体現し死に至ることによって無意識を一掃し、ハーマンの強調する意志の力とレイバーンの経験する他者の影響力の両方によって、社会全体は統御された健全な精神生活に至るといふ経過を辿る。

4

コリンズの *Armadale* は、「運命」をテーマとした作品である。アーマデイル (Alan Armadale) という同姓同名を持つ二人の主人公の物語が、同じく同姓同名の父親の代に起こった殺人事件の記憶を巡って展開する。一方のアーマデイルは、常に激情に任せて行動する無思慮で無鉄砲な人物で、最後まで殺人事件の秘密を知らぬまま終わる。彼はその単純な性格ゆえに、自分の利益を求める周囲の人物たちの思惑が彼を通して発現する構造を持ち、彼をして他人の欲望が交錯する場となる。それに対して、ミッドウィンター (Ozias Midwinter) と名乗るもう一方のアーマデイルは、「運命」に翻弄される人物である。自分の父親が親友アーマデイルの父親を殺害した事実を父親の残した遺書から知り、ミッドウィンターは父親の「運命」に対する強度の信仰を受け継いだのだと主張する。父親の遺書の命令を天啓のように受け入れ、秘密をアーマデイルから遠ざけることに成功しながらも、自分はその秘密に囚われていくミッドウィンターの精神構造の描写を辿りたい。

ミッドウィンターは、いったんスコットランドにて放浪生活などを送った後、二十歳のときにその偽名をもって小説舞台に再登場する。この時点で、彼の精神状態は錯乱していて「完全な狂気のように」(“like downright madness”, 59) 見えたとある。また、彼の性格については野蛮な獣性をもって特徴づけられている。Jenny Bourne Taylor が論じているように、コリンズの小説にはしばしば退化論の傾向を示すものが現れる (107, 136 - 37)。たとえば、*Woman in White* や *No Name* において、先代よりも後世の若い世代において、遺伝によって望ましくない悪しき性質のみが強化されて受け継がれてしまうという現象がたびたび見られた。ミッドウィンターの場合もその一例と考えることができる。彼は「母からは黒人の血を、父からは激情を受け継いだ」(“there was I, an ill-conditioned brat, with my mother’s negro blood in my face, and my murdering father’s passions in my heart, inheritor of their secret in spite of them”, 89) と語っているように、遺伝による性格の成立に拘る人物である。更に言えば、彼は父親の罪に固執するあまり、それを想起反復させてさらに強度なものにしていく傾向がある。この部分は、スペンサー (Herbert Spencer) が生理学的心理学の観点を展開し、個人の意志の積極的な選択も、社会全体の進化という大いなる過程において左右されてしまい、個人の自由意志は決定権を失うのだと論じたことと重ねられる (617-18)。

ミッドウィンターは「運命」に翻弄され苦悩しながらも、父の秘密を親友であるアーマデイルに明かさないために自己を過剰に抑圧することになる。彼の

病的な抑圧状態は、神経組織についての考察をもとに描写される。ホーベリ医師 (Dr Hawbury) がミッドウィンターを医学の専門的な見地から観察し、その落ち着きの無い様子を見て取り、「この男と神経組織を交換したくない」(“I wouldn't change nervous systems with that man”, 137) と結論づける場面がある。ミッドウィンターは、ヘドストーンと同様に、神経が研ぎ澄まされた緊張状態から不眠の様子が強調される人物である。

ミッドウィンターにとっての「運命」の拘束力は、アーマデイルの見た夢の話を通してさらに強化される。夢の内容は、過去の殺人事件と将来の出来事についての暗示である。この夢に関しては、アーマデイル、ミッドウィンター、ホーベリの三者の意見が真っ向から対立する場面がある。アーマデイルが「夢は消化不良が問題だ」と単純に結論するのに対し、ミッドウィンターは運命論に囚われており、ホーベリは当時の医学的見地から論理的に夢を説明する。「夢は脳が眠っている状態において、起きているときに作られたイメージや印象が再構築されたもので、時に不完全で矛盾したものとして構築されるものである」(“A Dream is the reproduction, in the sleeping state of the brain, of images and impressions produced on it in the waking state; and this reproduction is more or less involved, imperfect, or contradictory, as the action of certain faculties in the dreamer is controlled more or less completely by the influence of sleep,” 144)。この説明は当時のマクニッシュの夢についての理論と重なるものである。ここで、ミッドウィンターの神秘主義的な解釈とホーベリの医学的解釈が交錯し、決着せぬまま終わる。そのために、夢の解釈を基軸として、ますますミッドウィンターの神経組織の異変に焦点が当てられる。苦悩するミッドウィンターは、「ヒステリカルな発作」(“hysterical paroxysm,” 225) という症状に陥り、事ある毎にアーマデイルの夢の幻影に囚われる様子はモノマニア的な症状と重ねられる。ただし、ディケンズがモノマニアに陥るヘドストーンを野蛮な獣性をもって描写したのとは異なり、コリンズのミッドウィンターの場合は、モノマニアが強化されるにつれて、心中の苦悩が明らかにされるようになり、それと同時に彼の最初に見られた野蛮さは薄らいでいく傾向にある。ミッドウィンターの複雑な性質は、分別と愚かさが交じり合い、二重性をもちながら、内面を人に明かそうとしない不可解さをもって描かれる。

この運命を表す夢を巡って、アーマデイルとミッドウィンターの相互関係について考察したい。コリンズが個人の意識を二人の人物に分割させていると考えるならば、二人のアーマデイルは同一人物の意識の二重性を示していると読むことができる。一方のアーマデイルが、父親の代の殺人事件についてまったく無知のままであるのに対し、もう一方のアーマデイルはミッドウィンターと

いう偽名を使い、自分の正体と過去の秘密を親友に明かさぬまま一人苦悩する。単純明快な思考回路を持って単刀直入の意思表示をするアーマデイルが個人の表層の意識であるとするならば、その表層の意識の知り得ない抑圧された秘密を管理しつつもアーマデイルの認知しないところで苦悩し続けるミッドウィンターは個人の深層の意識といえる。現に、ミッドウィンターは過去の秘密の内容からだけでなく、彼の苦悩の発作的な症状からも、徹底的にアーマデイルを遠ざけ、アーマデイルを無知のままにとどめようとする。このように、アーマデイルとミッドウィンターを個人の意識の二重性を分割させた二人の人物として読むことは可能であろう。また、個人の意識を社会全体に転化させた状況としても読むことができる。個人の問題はその個人の意識内にとどまらず、社会全体の過去の記憶と将来の展望に大きく関わるという発想である。これは、社会と個人のあり方が互いに切り離せないものであるという当時の世界観に結びつく。ディケンズの作品に見られるような個人の意志の力と他者の影響力がなく、精神統御に向けて正しく癒され導かれることのない意識の乖離の問題が、神経系の連鎖を通して社会全体に蔓延していく。アーマデイルの見た夢は、社会全体が共有する意識のあり方として拡大解釈される。だからこそ夢の幻影が実現される毎に、個人の意志の力が及ばない「運命」によるものだという確信が強まる。ここで「運命」として提示されるのは、当時論点となっていた無意識の問題と重なる。個人が抑圧し実現不履行の状態に維持しようとするのが意志の力の及ばぬまま抑圧されずに実現する。「夢」は意識と無意識の乖離と結合を表す事象であるけれども、夢の内容が実現するということは、無意識が意識の力によって抑圧されることなく発現することとつながる。この無意識とは何なのか。この無意識は、夢の実現として表れていく過程においてミッドウィンターの抑圧する無意識と結びつく。夢の幻影を反復するミッドウィンター自身が夢という無意識（社会全体の無意識）を再体験し、確実に実現していく役割を担う。ミッドウィンターの無意識すなわち彼の抑圧する欲望とは、ミッドウィンターの抑圧する自己、すなわちアーマデイルというアイデンティティなのではないか。親友アーマデイルに対して自己の正体を押し隠し、親友のために自己を犠牲にするその裏で、自己発現の欲望が蠢いているのではなからうか。その自己発現の発露として、グウィルトが登場する。彼女がアーマデイルを殺害したいというその欲求は、押し隠されたミッドウィンターの欲望なのであり、この時点でミッドウィンターとグウィルト(Lydia Gwilt) は一体化する。ミッドウィンターの野蛮な獣性は徐々に薄れていくが、それはその一方でグウィルトが登場し、その残忍性を一身に体現し強調するからである。ミッドウィンターの無意識の欲望がグウィルトに転化されるその際たる事象として、グウィルトが偽医者と企んでアーマデイルを精神病院に監禁しようとする計画が展開する。

ミッドウィンターは夢の実現に伴い、眠りのない覚醒状態を体験する。また、グウィルトもまた不眠の状態が続き、薬の力を借りる場面がしばしば見られる。社会全体の不眠状態が不健全な状態を引き起こし、「夢」として表れた社会全体の共有する無意識が発現し、最終的にグウィルトの死によって社会全体の治癒と意識の回復に向かう。

5

両作品のヒロインの位置づけを当時の医学的見解から考察したい。両作品に現れるヒロインは対照的な役割を与えられているものの、その周囲への影響力という点から見ると、共通してメスメリズムの言説が用いられていると読むことができる。ディケンズもコリンズも当時のメスメリズムの方法に精通していて、実際の実験に立ち会うなどの経験があった（Kaplan 3-5; Peters 109）。両作家はそれをいかに作品に組み込んでいるのか。

Our Mutual Friend では、リジーとベラ（Bella Wilfer）という二人のヒロインが互いに理解し合い、共感し合う場面がある。特に、リジーからベラへのよき道徳的感化力というものがメスメリズムの手法と重ねられている。社会の底辺にありながら純粋な心を汚すことのないリジーは、父を支え、弟を養う健気な女性として描かれる。後にベラが振り返って言うように、「わがままで恩知らずで無鉄砲な」じゃじゃ馬からロクスミスよき従順な妻へと変貌するきっかけを与えたのが、この二人の会見だったといえる。ヒロイン自らが温かな家庭を育む良妻賢母型の人生を選び取るというこの過程を設定することによって、ディケンズは女性が自らの選択として家庭の天使を志向し、実践的な良性賢母型へと成長していく過程を賞賛するが、それはヴィクトリア時代の女性の理想像が女性自身の抑圧の上に立つものであるということを示唆するものである。まさにメスメリズムが社会の規範から逸脱する者に対して教唆する目的でなされていたことを考えると、この疑似医学が女性の欲求を抑制することによって男性主体の社会形態を維持する足掛かりとなっていたことを意味する。

これに対して、*Armadale* は、そうした社会が求める理想としてのヒロインではなく、社会が目を背けたくくなるような、しかしそれにもかかわらず好奇心から目を離せないような、いわゆる悪女をヒロインに据える。偽医者や詐欺師の世界を転々とし、夫殺しの容疑で死刑になりかけたという経歴を持つグウィルトは、ミッドウィンターと本名（アーマデイル）で結婚の契約を交わした後、アーマデイルを殺害して彼の未亡人と偽って財産を獲得しようと目論む。コリンズもまたメスメリズムの言説を用いて、彼女の影響力を描く。「動物磁気的な影響力を持つ手の感触」（“the magnetic influence of her touch,” 382）に繰り返し注

目し、グウィルトがミッドウインターに「一種金縛りに遭ったような強い影響」(“the breathless astonishment which had held him spell-bound to this moment,” 278) を及ぼすとしている。ディケンズがメスメリズムを用いてリジーのよき道徳的感化力を表すのに対して、コリンズはグウィルトの怪しい魅力、悪の道に導く圧倒的な恍惚感を表すためにメスメリズムを用いている。

しかし逆に、グウィルトを矯正するもまたこのメスメリズムによってである。彼女がミッドウインターから感化を受ける場面では、彼女の神経に言及が為される。「私の神経が震えているに違いない」(“My nerves *must* be shaken,” 441)。グウィルトは最初、黒尽くめの衣装と赤いペイズリーのショールに身を包んだ謎の女として登場しており、その内面の性質には深く言及がなされず、彼女の行った悪行の結果から悪性を見出そうとしていた。ミッドウインターがブロック牧師から送られたグウィルトの人相書をもとに彼女を観察し同定しようとしたように、当初は観相学的な人物診断に留まっていたのである。その後彼女の手紙や日記を明かすことによって心の内面を解き明かそうとする試みが為される。そしてコリンズが、精神構造の内部として重視したものは神経組織であって、表面的だった悪女の観察を掘り下げ、神経学的心理学の見地から診断を下すことによって、精神構造を認識しようとする。

結論

ディケンズとコリンズの二作品は、意識・無意識の関係と「ダブルコンシャネス」に関する論争に参加している。作品において、抑圧すべき自己を切り離し、無意識として異化しているが、それは意識の連続性において認知されるという結果に最終的に指示される。個人と社会との関係については、ディケンズは、意志的なコントロールを加えることで個人の自助と社会の自治につながると結論づけられるのに対して、コリンズは、運命という言葉を通して神経組織との関係で個人の意識をとらえ、神経の連鎖による集合的な意識の諸相を見ている。

Works Cited

- Baker, William, and William M. Clarke, eds. *The Letters of Wilkie Collins*. Vol. 1. Houndmills, Hampshire: Macmillan, 1999.
- Collins, Wilkie. *Armadale*. Ed. John Sutherland. London: Penguin, 1995.
- Conolly, John. *An Inquiry Concerning the Indications of Insanity, with Suggestions for the Better Protection and Care of the Insane*. London: Taylor, 1830.

- Dickens, Charles. *Our Mutual Friend*. Ed. Adrian Poole. London: Penguin, 1997.
- Esquirol, Jean Étienne. *Mental Maladies: A Treatise on Insanity*. Trans. E. K. Hunt. Philadelphia: Lea, 1845.
- Holland, Henry. *Chapters on Mental Physiology*. London: Longman, 1852.
- Kaplan, Fred. *Dickens and Mesmerism: The Hidden Springs of Fiction*. Princeton, NJ: Princeton UP, 1975.
- Lewes, George Henry. *Problems of Life and Mind*. London: Trübner, 1874.
- Macnish, Robert. *The Philosophy of Sleep*. New York: Appleton, 1834.
- Mann Christopher Wharton. "The Nerves." *Household Words* 30 May 1857: 522- 25.
- Oppenheim, Janet. "Shattered Nerves": *Doctors, Patients and Depression in Victorian England*. Oxford: Oxford UP, 1991.
- Peters, Catherine. *The King of Inventors: A Life of Wilkie Collins*. London: Secker, 1991.
- Prichard, James Cowles. *A Treatise on Insanity and Other Disorders Affecting the Mind*. London: Sherwood, 1835.
- Sala, George A. "Our Doubles." *Household Words* 10 July 1852: 388-91.
- Small, Helen. *Love's Madness: Medicine, the Novel and Female Insanity, 1800-1865*. London: Macmillan, 1982.
- Spencer, Herbert. *The Principles of Psychology*. London: Longman, 1855.
- Stone, Thomas. "Dreams." *Household Words* 8 Mar. 1851: 566-72.
- Symonds, John Addington. *Sleep and Dreams*. London: Longman, 1851.
- Taylor, Jenny Bourne. *In the Secret Theatre of Home: Wilkie Collins, Sensation Narrative, and Nineteenth-Century Psychology*. London: Routledge, 1988.
- Taylor, Jenny Bourne, and Sally Shuttleworth, eds. *Embodied Selves: An Anthology of Psychological Texts 1830-1890*. Oxford: Clarendon, 1998.
- Wigan, Arthur Ladbroke. *A New View of Insanity*. London: Longman, 1844.
- Wood, Jane. *Passion and Pathology in Victorian Fiction*. Oxford: Oxford UP, 2001.